



ばく通信

No.10



2018. 6月

特定非営利活動法人 発達障害児応援団 NPOばく

NPOばくの第10期総会が5月26日に行われました。2018年6月時点で通算144人の子どもの学習支援を行ってきました。2017年夏、10周年を記念して行った終了生アンケート調査では、①自信回復、自己理解、学び方についての支援効果が大きかったこと、②困り感のピーク時期に違いがあること（LDがある場合は中学生、LDがない場合は小学校低中学年）③保護者同士の話し合いの場や中学校での支援継続が求められていること、等が明らかになりました。調査結果は10周年記念パーティーで保護者と共有したり、静岡大学附属特別支援学校研究フォーラム（2017年11月）で発表したりしました。

調査結果等をもとに以下の事業を立ち上げることにしました。利用者の負担軽減を図るために助成金の獲得にも挑戦しました（結果は…残念）。

しかし、1人の子どもに対して、アセスメントに基づく学習支援を、発達相談員と学習支援員がペアになって行う形式は全国的にも珍しいと言われていています。助成金等の応援のない中で、質を落とさず続けていくのは厳しいと感じることもありますが、この実績を生かすためにも、スタッフ一同努力したいと思います。今後ともご支援を賜りますよう、賛助会員のご継続（ご加入）よろしくお願い申し上げます。

登録制ですので関心のある方はお問い合わせください

- ①終了生フォローアップ事業 “ほっとルーム” ちょこっと相談 しゅくだい広場 座談会
- ②不登校支援事業 火曜日と木曜日 10時～3時
- ③支援者連携事業 “おべんきょうCafé” 毎月第4火曜日夜 公認心理師試験対策と事例検討会

今年度在籍（2018年6月現在）

・入室児 33名（不定期指導2名を含む）

・スタッフ

指導担当	14名	元教員、特別支援教育士、臨床発達心理士	言語聴覚士	臨床心理士
相談担当	7名（指導兼任3名）	臨床発達心理士	臨床心理士	社会福祉士
事務担当等	2名			

計 18名（指導担当と相談担当が重複しているものがあります）

活動報告

ばくの指導を希望される子ども達の中に、小2の後半くらいから学習意欲が落ちたり、怒りっぽくなったり等の問題行動が目立ってくる子ども達があります。ひらがなの読み書きや数概念の土台はなんとかクリアしたのに、計算問題や文章題がグリーンと増えて、困り感が問題行動として表面化してきたようです。保護者が先生やスクールカウンセラー、発達障害者支援センター等に相談したり、インターネットで調べたりして、ばくに相談という流れが割合多いです。

でも、問題が出た時が特性（子どもの分かり方、考え方）を理解するチャンス。ばくの特徴は相談担当と指導担当がペアになって、その子にあった支援を考えます。指導のいくつかを紹介します。

★ワーキングメモリの低さに配慮した算数指導

学習の土俵に乗りにくいA児（小3）に対して、遂行機能不全の視点で課題を捉え直すことにしました。知能検査（WISC-IV）をとると、小1時点での検査（WISC-III）では見えなかった特徴…ワーキングメモリの低さ…がクローズアップされました。そこで、苦手意識が強かった算数について、ワーキングメモリの負荷を減らす支援を行い、「できた」感を感じられる指導を心がけました。

＜目標＞学年相応の算数の問題に取り組む。

＜手だて＞

- （1）担当指導者が 問題を読み上げる、九九を途中まで言う、次の手順を言う。
- （2）解き方の見本を見せてから問題を解かせる。
- （3）絵や表を提示したり、キーワードに色付けしたりして、問題文の意味理解を促す。

＜評価＞

取り組み始めた時期は、多くの支援を必要としましたが、年度末には問題の読み上げだけで自力で計算できるようになりました。また、グラフの軸の単位を色付けすると、横軸縦軸の関係をすぐに理解し、グラフを読み取ることができるようになりました。保護者から「7の数がパッとわかるようになった。家でも宿題をする時、以前ほど荒れなくなってきた。算数が得意という感じを持つようになった」と伝えられました。

★抽象的な課題にチャレンジさせるための指導

2年生になって授業中の離席が出始めたB児。特に算数の苦手意識が強く出てきたようです。そこで、マグネットを使った計算練習や、絵を見て式を立てる指導を徹底的に行うなかで、算数への苦手意識が軽減されてきました。3年生では、お金を使った計算や買い物ごっこでおつりの計算などを考えるなかで、3桁の足し算、引き算を筆算で行うことがスムーズになりました。3年生の終わりには、自分でお金が払えるようになったことを、保護者も本人も嬉しそうに話してくれました。4年生では学年相応の基礎的な算数の問題を解くことができるようになりました。



できない、わからない状態が続き、学習意欲を失いかけたA児とB児。この困っている時期に丁寧に指導を行っていくうちに、諦めないでチャレンジしていく力（勤勉性）が作られたように思います。

とはいえ、発達凸凹があると次々と課題がでてくるのも事実。

でも…大丈夫。大切にされた経験を積み重ねると、その子らしく輝いていきます。

★コミュニケーションの弱さを支える支援

C児（受け身タイプ）はおとなしいので、なかなか困っていることに気づいてもらいにくかったようです。3年生になって登校しぶりがでてきたのでばくに相談。コミュニケーションにも課題があり、困っても助けを求めることができずに固まってしまうC児。自己肯定感を育てていくことを目標に、世の中の出来事や本児の関心事について十分に話をさせることを基本にした指導を続けました。自分が得意なことや自分の興味関心を指導者と話せるようになると、表情も柔らかくなっていきました。そして、少しずつ、他の大人や同年齢の人との関わりができるようになっていきました。その後、高校では自分に合った進路を選択し、休むことなく登校できています。

静岡県静岡市駿河区大和2丁目6番5号 東京堂ビル305号

電話・FAX：054-266-5616（火～金曜日 15時～19時30分）

賛助会費振込先：郵便口座番号 00810-6-134767 発達障害児応援団NPOばく
（一口1000円、何口でも）

E-mail:baku@orion.ocn.ne.jp

URL：<http://www.npobaku.sakura.ne.jp>